

修士論文（要旨）

2011年1月

女子大学生の高齢者介護に関する意識

指導 新野直明 教授

老年学研究科

老年学専攻

209J6008

中込由美

目次

I. はじめに	
1. 研究の背景	1
2. 先行研究	2
3. 研究目的	3
II. 研究方法	
1. 予備調査	
1) 予備調査の対象	3
2) 予備調査の実施日時	3
3) 予備調査の結果	3
2. 本調査	
1) 調査対象	4
2) 調査方法	4
3) 調査時期	4
4) 調査内容	4
5) 分析方法	5
3. 倫理的配慮	5
III. 結果	
1. 女子大学生の特性	6
2. 高齢者介護の意識	
1) 高齢者介護に関する関心	6
2) 家族の高齢者介護の内容と可能性	6
3) 家族の高齢者介護の可能な支援時間数	7
4) 家族の高齢者介護に影響すると思われる理由	7
5) 女子大学生の属性と高齢者介護に関する関心の関係	8
IV. 考察	
1. 女子大学生の高齢者介護に関する関心	8
2. 家族の高齢者介護の支援の可能性	9
3. 女子大学生の属性と高齢者介護に関する関心の関係	10
4. 今後の課題	11
V. 結論	11
謝辞	12

参考文献
資料

I. はじめに

1. 研究の背景：日本の高齢化は、急速に進みそれに伴って介護を必要とする高齢者も増加しつつある。人々にとって高齢者介護は避けることのできない社会的課題となっている。介護保険制度施行され介護支援が行われて10年が過ぎたが、高齢者介護は同居あるいは別居している家族に委ねられていることには変わらない。^{1)2)3)4)5)6)7)8)9) 10)11)}
2. 先行研究：若者の高齢者介護に関する意識調査は、将来的な介護志向であり、現状で自らが介護を担うことを想定した報告は少なかった。^{12) 13) 14) 15) 16) 17) 18)}
3. 研究目的：女子大学生の高齢者介護に関する意識として、現状どのような関心を持ち、どのような状況で主介護者を支える副介護者として手助けを担うことができるのかその可能性を調査した。女子大学生が、高齢者介護を担う主介護者を支援することができるのかを検討することは、主介護者を支える高齢者介護の取り組みを推進すると考えた。

II. 研究方法

1. 予備調査：本調査を始める前に、予備調査を実施した。
2. 本調査：1) 調査対象：都内の1つの女子大学の心理カウンセリング学科の1年生97名、2年生93名の190名のうち、養護教諭教職課程を専攻している1年生71名と2年生69名の合計140名を調査対象とした。2) 調査方法：1年生と2年生のそれぞれの授業終了後、教室で自記式質問票での集合調査を実施した。3) 調査時期：平成22年11月に調査を実施した。4) 調査内容：(1) 基本属性と(2) 高齢者介護に関する①高齢者介護の関心、②家族の高齢者介護の支援の関心、③近所の高齢者介護の支援の関心と④家族の高齢者介護の内容と可能性、⑤家族の高齢者介護の可能な支援時間数、⑥家族の高齢者介護を行いたいと思う理由、⑦家族の高齢者介護を難しいと思う理由を質問項目とした。5) 分析方法：高齢者介護に関する調査項目の回答を点数化し、その分布をみた。女子大学生の基本属性と「高齢者介護の関心」、「家族の高齢者介護の支援の関心」、「近所の高齢者介護の支援の関心」とのそれぞれの関係を χ^2 検定で分析した。
3. 倫理的配慮：研究対象者への調査の概要を説明し、調査協力の同意書に署名をした対象者のみに調査を実施した。東京家政大学の倫理委員会の審査で承認を得て実施した。

III. 結果：調査協力を得られた女子大学生は、131名で有効回収率93.6%であった。「家族の高齢者介護を支援する関心」127名(96.9%)、家族の高齢者介護を行う理由は「家族だから」111名(84.7%)、家族の高齢者介護を難しいと思う理由は、「介護の知識・技術がない」99名(75.6%)と最も多く、身体介護8項目は、「一人でする」あるいは「家族と一緒に手伝う」、生活援助5項目は、「一人でする」可能性があった。「家族の高齢者介護の可能な支援時間数」は、1週間当たり平均12.7時間であった。女子大学生の属性と高齢者介護に関する関心の関係では、「介護経験の有無」と「高齢者介護の関心」の間で有意($\chi^2(3)=15.011$, $p < .01$)な関連が認められた。

IV. 考察：女子大学生は、家族の高齢者介護の支援の関心が高く、家族の高齢者の身体介護と生活援助への可能性があり、家族であることを重要視されていたと考えられた。

V. 結論：女子大学生は、家族の高齢者介護における主介護者を支援する副介護者としての役割を担うことが期待できると示唆された。「介護経験の有無」と「高齢者介護の関心」の間で有意な関連が認められたが、どのような介護経験が高齢者介護の関心を高めるのかを検証することが課題となった。

参考文献

- 1) 内閣府：平成 22 年版高齢社会白書；平成 21 年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況（平成 22 年 5 月 14 日公表）. 内閣府ホームページ. 平成 22 年 6 月 20 日取得 (http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/gaiyou/22pdf_indexg.html)
- 2) 和気純子・浅井正行・和気康太・武川正吾：介護保険制度施行 5 年後の高齢者の介護サービス認知と利用意向－全国調査(2005 年)のデータ分析を通して－, 厚生の指標, 54 (15), p1-8, 2007.
- 3) 広瀬美千代・岡田進一・白澤正和：家族介護者の介護に対する肯定的評価に関連する要因, 厚生の指標, 52 (8), p1-7, 2005.
- 4) 厚生労働省：平成 19 年国民生活基礎調査；介護の状況. 厚生労働省ホームページ (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-19-1.html>). 平成 21 年 5 月 15 日取得
- 5) 内閣府：高齢社会対策に関する調査；平成 15 年度 年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査. 内閣府ホームページ. 平成 21 年 5 月 15 日取得 (http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15_kenkyu/html/0-1.html)
- 6) 内閣府：内閣府大臣官房政府広報室：高齢者介護に関する世論調査, 内閣府ホームページ <http://www8.cao.go.jp/survey/h15/h15-kourei/index.html>. 平成 21 年 5 月 15 日
- 7) 新鞍真理子・荒木晴美・炭谷靖子：家族介護者の続柄別にみた介護に対する意識の特徴, 老年社会科学, 30 (3), p415-425, 2008.
- 8) 杉澤秀博・中谷陽明・杉原陽子：介護保険制度の評価－高齢者・家族の視点から－, 三和書籍, p62-63, 2005.
- 9) 東京都老人総合研究所社会福祉部門：高齢者の家族介護と介護サービスニーズ, 光生館, 1996.
- 10) 山根律子：老親の介護に関する若年女性の意識, 社会老年学, 35, p57-65, 1992.
- 11) 中西泰子：若者の介護意識－親子関係とジェンダー不均衡－, 勁草書房, 2009.
- 12) 内閣府：高齢社会対策に関する調査；平成 10 年度 児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査. 内閣府ホームページ. 平成 21 年 5 月 15 日取得 (http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h10_kiso/html/0-1.html)
- 13) 青柳育子：高校生の介護意識の実態と課題－高等学校 3 校のアンケート調査から－, 日本生涯教育学会論集, 29, p163-170, 2008.
- 14) 鈴木圭子・宮堀真澄・大泉哲子ほか：高齢者介護と家族についての意識に関する一考察－介護福祉士養成校在校生への調査を通して－, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 5, P29-37, 2000.
- 15) 藤若恵美・進藤貴子・永田博：孫世代の高齢者介護観と介助に対する自信－祖父母との親密性と介護経験との関連－, 川崎医療福祉学会誌, 19 (2), p351-357, 2010.
- 16) 中込由美：女子大学生の家族介護に関する意識の現状, 第 40 回日本看護学会論文集地域看護, p56 - 58, 2009.
- 17) 渡辺俊之：介護家族という新しい家族, 現代のエスプリ (437), 至文堂, p 26-30, 2003.
- 18) 渡辺俊之：介護者と家族の心のケア, 金剛出版, p 15-25, 2009.
- 19) 春日キスヨ：介護問題の社会学, 岩波書店, 2001.